

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日  
平成三十一年二月一日  
省特別換水認雜誌第六十七号  
第百二十二卷第二号

# ホトトギス

二月号



## 風雅の小筥〔十三〕

ホトトギス社

このコーナーも丸一年が過ぎ、今回から二年目に入る事になる。平成という時代もあと三カ月を残すのみとなった。

このコーナーではあまり大袈裟な俳論を申し上げるつもりはないが、雑詠の裏面に色々御意見を多数頂き、誠にありがとうございます。これからもどしどし御意見をお待ち申し上げたいと思っています。又内容についての御希望や、御質問等も頂けると、ここで取り上げてみようかとも思っている。こちらもお待ち申し上げます。

ホトトギスの雑詠選では、基本的に添削をしてでも入選にする、という事はしていない。やはり雑詠欄というのは、作者が選者に渾身の作品を問うという高尚な場として虚子の時代から続けて来たものと認識しているからである。私自身は現在、ある総合俳誌の選句を別に受け持っているが、同時にそこへ投句された作品の中からピックアップして添削もしているが、ホトトギスの雑詠も含め、御投句なさる方の誤字が最近多くなってきたように思える。実はこの事に關してもう二十年程前になるのではないかと思うが、ある大会でちよつとした講演、というよりスピーチをさせて頂いた時にこの問題に触れた記憶があるが、その時「投句する前に今一度一字一句全て辞書で確認しては如何ですか？」と申し上げた事がある。一見とても手間のようにも思えるが、五七・五の十七音、文字数はもつと少ないのである。御投句の時、是非これくらいの手間をかけて頂くのは如何だろうか。

句日記 汀子

平成三十年二月三日 菅屋ホトギス会

心して二月の日々を過ごさばや

二月四日 下萌句会

寒明といふに心の添はぬ日よ

快晴の六甲山よ寒明くる

待つ心ありて二月のシクラメン

二月五日 ロイヤル俳壇

梅ふふみ初めしを見つつ旅立ちぬ

春浅きこともう春と思ひつつ

まだ風に蕾ひそめていぬふぐり

春寒といへばまだまだこれからと

期待へとつなぐ白梅紅梅に

二月八日 清交社

余寒とも言へざる日々をかこちけり

幾度も逢へて年賀の心なほ

露の墓野に明るさの戻り来し

朝の雨上りて野焼日和とも

又雨に阿蘇の野焼の阻まれし

流感になりしと電話受く余寒

玻璃の外を見れば余寒のなき如く

余寒とてあなどりがたき旅路かな

二月九日 工業倶楽部

寄せつけぬとは春の風邪なりしかな

二月十三日 大阪倶楽部

遅れぬし梅ほつほつとほつほつと

初音聞きとめし旅路の華やげる

春寒の出先用意の旅靴

わが庭の梅の遅速を問ふことも

春寒や仕事の山を崩しつつ

二月十三日 綿業倶楽部

猫柳集まつて来し日の光

春浅きとも省略のできぬ日々

過ぎ易き二月半ばでありしかな

二月十四日 夏潮句会

邂逅の生徒よ春の灯の下に

下萌を踏みし靴音消えてをり

寒牡丹咲き倦むことのなかりけり

祝はれし米寿の名残室の花

集ふよりパレンタインの日なりけり

春寒くとも明るさの濃れる

二月二十日 有恒俳句会

走る火を目で追ふばかり野を焼ける

春寒くとも空青し山美し

梅ほつほつ散るに間のある庭樂し

鶯の一景山のふところ

家居して春告鳥を待つ心

二月二十日 無名会

旅二月走り出したる心かな

白梅の白紅梅の魁けし

いつまでも若くはないと旅二月

行事など無事に過ぎゆく二月かな

ふるひ立つ愈け心も梅の旅

紅梅の咲き進む日々家居して

二月二十一日 時雨句会

世の中を堂々と行く猫の恋

春寒くとも早朝の旅立に

人悼む心のやがて春寒し

訃報聞きつつ春寒き心かな

この辺に猫見かけざる猫の恋

二月二十二日 きさらぎ会二五〇回

白梅に遅速のありて旅に発つ

春寒といへば又病む友のこと

きさらぎ会記念日春の雪と書く

会二百五十回なる春の雪

今日は虚子生誕日なり春の雪

人は病み人は生れて春寒し

二月二十三日 アネモネ句会

欠席の多き句会や春寒し

訃報とは突然に梅寒き中

梅寒し我より若き友の訃よ

二月二十三日 俳誌依頼 悼 兜太氏

なつかしき兜太の笑顔偲ぶ春

もう一度論争したき春寒し

春眠の兜太をお乗せしたる日も

春眠を覚えしといふ兜太乗せ

二月二十六日 淡路島吟行

母上の里と聞きつつ梅の丘

近づけば紅梅ほどけゆく山路

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

平成三十年二月一日 蕉心会

大川に碧梧桐忌の流れかな  
 虚子曰く独楽のはじける如き今日  
 守旧派に碧梧桐忌といふ節目  
 蕉像を避けて片寄せられし雪  
 曇天に冬芽鎧うてをりにけり  
 探梅の目に叶ひたる館の庭  
 冬帝の少し長居をするつもり  
 子規の文字躍り出したる寒灯下  
二月二日 カトリック新聞選者吟  
 嫁ぎたる娘の新居てふ恵方かな  
二月三日 芦屋ホトギス会  
 白梅の笑む白銀の都心かな  
二月四日 野夕谷芦屋例会  
 磯竈真珠筏を指呼にして  
 創刊号繕きもして鳴雪忌  
二月四日 青嵐会芦屋例会  
 犬ふぐり地球を更に青くして  
 館の壁影黒々と春立てり  
 立春やピンヒールやて言ふたやん  
二月六日 「海」三十五周年祝句  
 雲の峰飛竜に変わりゆく刹那  
 夏炬焚く大和に俳誌ふる限り  
 虹渡り来て武蔵野の賀に参ず  
二月八日 土筆会  
 野火走り古都塗り替へてゆきにけり

二月十一日 秋田雪まつり吟行会

寒明や出口の見えぬ闇抱へ  
 盆梅や羽音も景の一部分  
 寒明や百寿の祝ぎに参じ得て  
 鳴歸る前てふ陣の静寂かな  
二月十一日 秋田雪まつり吟行会  
 百穂の縁を繋ぐ春灯下  
 雪のひま広げつつ雨募りつつ  
 積み上げて積み上げて尚春の雪  
 そぞろ歩す雪解雫を浴びながら  
 電のひまより現はるる武家屋敷  
 陸奥に二月礼者の一會かな  
二月十二日 朝日カルチャー若草句会  
 大雪崩地球の裏を戦かせ  
 野を焼けば季節弾んでゆきにけり  
 昨日陸奥今日首都に居る二月  
 一と雫雪崩となつてゆく仔細  
 野火走る底の生流転かな  
 二月月の空へ都庁の伸びやかに  
 二月月の硬き空より白き使者  
二月十五日 北國文芸選者吟  
 春の雪二センチに戦く都心  
二月十五日 登高会  
 梯を甍たらせて山菜莢黄  
 かまくらやらんせたんせと子等の笑み  
 麦を踏む大地に果てがあるやうに  
 山菜莢黄句座の思ひ出繕けば  
 かまくらや星と存問する百基  
 禁煙はそろそろ十年七山菜莢黄  
二月十六日 「天地」春の集い  
 祝ぎ心集ひ大琵琶凍ゆるむ  
 大琵琶の空引き寄せて鳥歸る

二月十八日 虚子生誕俳句祭

残雪の比良に寄り添ふ湖の綺羅  
二月十八日 虚子生誕俳句祭  
 里山の季節彩る初音かな  
二月二十日 静の会  
 尾を立ててより恋猫となりゆけり  
 その中の三毛は奥手や猫の恋  
二月二十五日 青嵐会東京例会  
 戻返る又一人行き二人行き  
 青き踏む犬のリードの伸び縮み  
 マラソンの前の静けき余寒かな  
 その中の紅梅白を統べてをり  
二月二十五日 野分会東京例会  
 磯竈又あの人の話など  
 俳諧の風雲児逝く鳴雪忌  
 兜太忌を加へ鳴雪忌の来る  
二月二十七日 大島紫篁様句集序句  
 これよりは紀寿へと硯洗ひけり  
二月二十七日 若水句会  
 湯を染めて蒨草の舞ひ止まらず  
 その中の蒨草に箸止まる  
 白き嶺々より香り立つ雪解風  
 一滴の雪解雫に山動く  
 俳壇の重鎮攫ふ雪解風  
 下萌や虚子生誕の祝ぎ心  
 初めてのあんよ受け止め草青む  
二月二十八日 目黒学園句会  
 針山は祖母の形見や針供養  
 竜となり虎となり野火走りゆく  
 猫ちのくの残雪乗せて列車着く  
 都心てふ電柱脇に残る雪  
 魂鎮め霊目覚めさせ野火走る

# 雑詠

## 廣太郎 選

道はこれから体育の日を歩む 神戸 立村霜衣  
 晴れずとも体育の日の怯まぬ歩 同  
 体育の日や心また鍛ふべし 同  
 みちのくの友待つ旅へ秋涼し 長岡 安原 葉  
 心竹の一事も偲ぶ竹の春 同  
 誰言ふとなく朝顔の家といふ 同  
 花の香の風に乗り換へ秋の蝶 神戸 山田佳乃  
 待宵の窓の隅々まで磨く 同  
 糸瓜忌や路面電車に投句箱 同  
 帰り花にも一年といふ輪廻 香川 湯川 雅  
 初鴨や臆病に臆病に陣 同  
 秋霖や飛石濡れつつ続く 同  
 朝の白夕べの白に花木権 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 こぼれ萩銀の雫をとどめつつ 同  
 鉦叩風に乗りたる野の調べ 同  
 炎帝も我も死に物狂ひかな 相模原 木村享史  
 草深きところは甘き草いきれ 同  
 これしきのことと残暑を老の生く 同

夢二忌の速夜の草の露白し 渋川 木暮陶句郎  
 湖走る霧の百態夢二の忌 同  
 雨太く二百十日の湖叩く 同  
 月百態女百態雲百態 神戸 和田華凜  
 哲学の道も今宵は月の道 同  
 月光にモノロー白きドレス着て 同  
 鷹の威を翼に秘めし渡りかな 同  
 きちかうや風に折目を正すかに 同  
 藪虱秘密の基地はあの辺り 同  
 秋灯を足しても何か欠けし部屋 同  
 虚ろなるところに虚ろなる秋思 西宮 本郷桂子  
 咲く庭を丸ごと供華に露の秋 同  
 原爆を知らぬ旅行者原爆忌 福山 竹下陶子  
 ホ句故の長寿を生きし生身魂 同  
 白寿まで生きよと言はれ生身魂 同  
 まんまるの目で俳磚を読む眼白 神戸 藤井啓子  
 遅れ着く信濃便りは霧に濡れ 同  
 夏逝けり航跡といふ忘れもの 同  
 数増えて今日の木権の咲いてゐし 熱海 嶋田一步  
 木権咲く一と日がつづくこととなる 同  
 木権咲き稀に二日目あることも 同  
 ひと月を一夜のための菊枕 東京 田丸千種  
 独酌の甘美な歎き菊枕 同  
 風狂に果つる女や菊枕 同

## 雑詠句評（二月号より）

### 消ゆることそれも演出揚花火 神戸 後藤比奈夫

最近の揚花火は、色も形も多彩で、昔のようにボンと上がって、単純に消えてゆくものは、殆ど見かけなくなつた。驚くほどさまざまな形を成しては消えてゆく。また、筒のそばに職人がいて点火するのではなく、コンピュータによる打ち上げ制御が、なされてはいるらしいが、はかなく消えてゆくという花火の情緒のタイミングは、大切にされているようである。「それも演出」と、様変わりしてゆく揚花火を客観的に眺めながらも、興味深く楽しんでいる作者なのではないだろうか。（眞理子）

打ち上げた瞬間から光の尾を曳いて高く揚がつてゆくにつれて見ている人の期待も最高潮に達した時、正に花火は大輪の花を咲かせるのである。普通の発想ではここ迄が花火の演出と考えると、作者はこの後消えて、闇の世界までその演出が及んでいくと感じているのである。何と新鮮な事だろう。（廣太郎）

### 箱庭の空釣人の竿の上 徳島 岩田公次

一読した時は、この空は本当の空なのか、作り物なのか、と思つてしまった。それは、竿の上、というのが、ちよこつと乗つかった感じに思えてしまったからだ。しかし箱庭の写真をチェックしてみても、背景に空をしつらえたものはあつても箱庭に空はない。小さな箱庭の小流れに釣り糸を垂らす細い竿、その上に広がる大きな夏青空を思い浮かべてこそ箱庭が生きてくるのだろう。想像力の欠如が鑑賞を狭くしてしまう、とあらためて反省した。（肖子）

結構今でも箱庭を趣味にしておられる方はおられるようで、毎月行く句会場の近くに箱庭を趣味としている御年輩の方がおられて、何とも精密な造りである。水の流れにも涼しさがかんじられて、あらためて夏の季題を実感する。この句も、大自然とミニチュアの対比を上手く表現している。（廣太郎）

天地有情

老生きてゆかな極暑をへこたれず  
汗忘れ諷詠塾の夜に学ぶ  
相模原 木村享史  
松蟬の鳴いて地軸を揺らしけり  
東京 稲畑廣太郎  
祝ぎの座へ卯月曇を遠ざけて  
同  
秋草や君の笑顔をまた偲ぶ  
長岡 安原 葉  
人生やこの八月も乗り切りし  
同  
踊下駄今宵履き手に恙あり  
神戸 後藤比奈夫  
祭足袋にも日進と月歩あり  
同  
高僧の投句預り盆の句座  
同 千原叡子  
美穂女てふ俳人ありき秋扇  
同  
新涼やものあはれにつつまる  
同 浜崎素粒子  
愁傷のこと多すぎる白露かな  
同  
秋しぐれ草加松原ひと濡らし  
千葉 大木さつき  
望楼の高さに雨後の新松子  
同  
殉教の島の無花果たわわなり  
熊本 岩岡中正  
空仰ぐ海の秋思の深ければ  
同  
朝寒も不意の過客でありにけり  
金沢 藤浦昭代  
快晴も風の芒となる夕べ  
同

盆子選

ワープロの止んで夜なべの終りしか  
東京 河野昭彦  
山会となれば夜なべの日となりぬ  
同  
菊月や墨の香残る表彰状  
同 大久保白村  
あるがままにて増え過ぎし秋桜  
同  
秋冷の俄につのり今日の雨  
同 山田閨子  
朝霧や夜通しの雨止んでをり  
同  
露の世に身をおき急ぐことなかれ  
神戸 和田華凜  
水底に伝説秘めて澄める水  
同  
新涼や片づく机辺心にも  
高松 永森ケイ子  
時として躓くことも爽やかに  
同  
蟻地獄待つといふ刻過ぎてゆく  
熱海 嶋田一步  
蟻地獄人は時間といふを持つ  
同  
さつと雨来て風の盆らしくくなる  
東京 今井千鶴子  
雨もよひふと上弦の月ちらり  
同  
筆庄の弱き手紙のそぞろ寒  
神戸 三村純也  
青空へ添水の音の跳ね返る  
同  
夏座敷整へもして忌を修す  
吹田 大橋 暁  
大樹の影長々として晩夏かな  
同